

## アマルナ型住宅の初例に関する考察

古代エジプト・アマルナ型住宅に関する建築学的考察 1

## A STUDY ON THE FORERUNNERS OF THE AMARNA-TYPE HOUSE

Architectural studies on the Amarna-type house in ancient Egypt 1

遠藤 孝治\*

Takaharu ENDO

Three independent houses are preserved at the Palace of Amenhotep III in Malqata, locating to the west bank of Thebes. In the rectangular plan, a square hall is located at the center of each house with an entrance to the northeast side and a master's bedchamber is located at the southwest corner, similar to the standard Amarna-type houses. As it is evident that these houses were built before the Amarna period, they can be regarded as forerunners of the high-ranked houses in Amarna city. A study on these buildings would further contribute to the research on the origins of this house-type.

**Keywords:** Ancient Egypt, New Kingdom, Amarna-type House, Malqata Palace, Thebes  
古代エジプト、新王国時代、アマルナ型住宅、マルカタ王宮、テーベ

1. はじめに<sup>1)</sup>

古代エジプト建築についての探求は、エジプト学という専門分野が確立される以前から、ピラミッドや神殿に代表される大規模な石造の記念碑的あるいは宗教的建造物に強い情熱が捧げられてきたと言っても良く、この一方で当時の人々が実際に居住した日乾煉瓦造の世俗建築についての関心は、長らくの隅、影に潜まざるを得なかった。1958年にウィルソンがエジプトを「都市なき文明」と評したことはこうした状況を良く表している<sup>2)</sup>。ところがこの後に、西欧の世界観を基準としたウィルソンの見解は改められるべきであるという視点がピータック<sup>3)</sup>やケンブ<sup>4)</sup>らによってしきりに投じられ、都市遺跡における長期計画の精密な考古学調査が諸外国の調査隊により各地で開始される契機となった。古代エジプトの住宅建築に関する資料と研究成果は、まだまだ少ないながらもこうした経緯に従い、現在は年を重ねるごとに充実の一途をたどりつつある。

中でも比較的良く知られるのは、西洋住宅史において最初に取り上げられる「アマルナ型住宅」と呼ばれる新王国時代の独立住宅であり、第18王朝の王アケエンアテン（紀元前約1353～1336年頃）が造営した都市アマルナ（古代名：アケトアテン）から多くの遺構が見つかることからこの名前が付けられている。アマルナ型住宅に関する研究は、19世紀末から20世紀初頭にアマルナ遺跡を実際に

発掘したピートリ<sup>5)</sup>やピート<sup>6)</sup>、並びにリッケ<sup>7)</sup>らによる調査報告において、住宅を構成する基本的特徴が整理されたのが最初であるが、数百戸に上る住宅の詳細平面図が刊行され<sup>8)</sup>、またアマルナ遺跡の全体配置図が改訂されるなど<sup>9)</sup>、建築学的研究に用いられる図面資料の数が飛躍的に増大したのは比較的最近のことである。

これらの報告図面を一次資料としてすでにいくつかの興味深い論考が相次いで発表され<sup>10)</sup>、アマルナ型住宅研究は近年かなりの進展が見られるが、この形式の住宅が成立するまでの詳しい経緯については、古くはリッケ<sup>11)</sup>やフェアマン<sup>12)</sup>が、最近ではアーノルド<sup>13)</sup>やフォン・ビルグリム<sup>14)</sup>が指摘するように、エジプトにおける住宅形式の伝統的な流れに添うものだという見方がなされる一方で、ラコパーラー<sup>15)</sup>などは、むしろ新王国時代における宮殿建築の形式を意図的に採用しているのではないかと推測しており、依然として意見が定まっていない。

こうした中で注目されるのは、早稲田大学エジプト学研究所が1985年から再調査（元主任：故渡辺保忠・早稲田大学理工学部教授（当時）、現主任：吉村作治・同大学人間科学部教授）を開始したテーベ（現在のルクソール市）西岸のマルカタ王宮内に存在する3軒の独立住宅である。これらの住宅に関しては、早稲田隊の調査によって平面の略測と観察がなされ、1993年に刊行された報告書「マルカタ王

\* 日本学術振興会 特別研究員・工修

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, M. Eng.

宮の研究」の中で後藤久氏（日本女子大学住居学科教授）により、現況報告とともに「アマルナの多数の独立住居と酷似した点がかがわれる」と指摘されている<sup>16</sup>。この指摘の重要な点は、これらの住宅がテーベからアマルナへの遷都より以前に造られたことを踏まえるならば、アマルナにおけるアクエンアテン王の都市に造られた高官のための住宅形式の先例と見做されることである。

本稿では後藤氏の指摘を基盤に置き、一般にアマルナ型住宅と呼ばれる住宅形式の基本的原則を最初に整理して、マルカタ王宮内の3軒の住宅が確かにアマルナ型として計画されたことを改めて検証し、合わせて、他にアマルナ以外に存在したと指摘されているアマルナ型住宅に類似した例についての既往研究の問題点を整理することで、これらの住宅遺構の建築史的な位置づけを明らかにすることとした。

## 2. アマルナ型住宅の基本的原則

現在のカイロとルクソールのほぼ中間に位置するアマルナ遺跡は、アメンヘテプ4世（後にアクエンアテンと改名）の治世第4年あるいは第5年に新都として建設が開始されたものである。既存の国家神であるアメン神を排除して、太陽円盤で表されるアテン神を全ての神の中心とする宗教改革を断行した同王は、他の宗教勢力の影響を受けることがないように、これまでに誰も定住することのなかった土地を選択したが、わずか17年の治世が終末を迎えると、ツタンカーメン王により北のメンフィスへと遷都がなされ、その後この都市は再び大きく利用されることがないまま砂の中に埋もれた。この結果、人為的な破壊をほとんど受けずに済み、一時代の都市の様相を残す大変稀有な遺跡となっている。

アマルナ遺跡における住宅遺構の発掘が大いに進められた背景は以上の理由にあり、全長約10kmに渡る都市域において、これまでに七百戸以上の住宅遺構が明らかにされている。しかし、一般にアマルナ型住宅と呼ばれるのは、住宅遺構の平面規模分類をおこなった

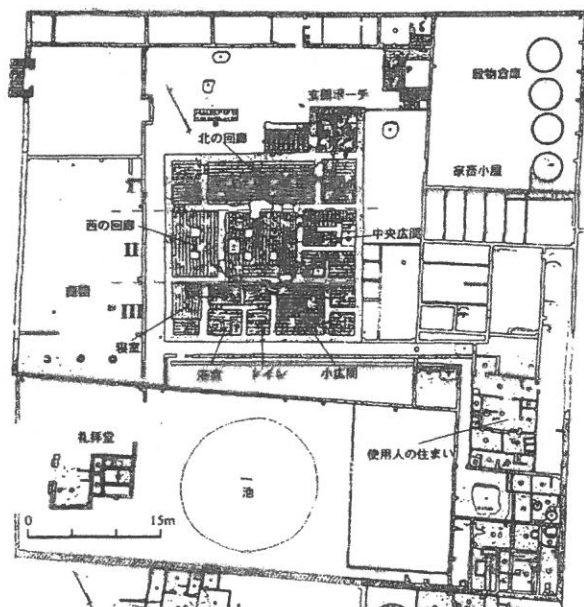


図1 アマルナ型住宅の典型例 平面図  
(Borchardt and Ricke 1960, Plan 23: P47.19 より)

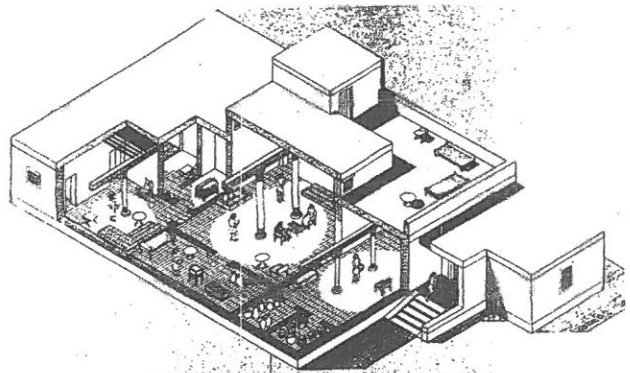


図2 アマルナ型住宅 断面アイソメ図  
(Tietze 1996, Abb. 5 より)

ティーツェによると、規模がおおよそ100m<sup>2</sup>から最大で500m<sup>2</sup>ほどの大型のものに限定され、全遺構数のうちの10%にも満たない<sup>17</sup>。この点はエジプト学ならびに西洋建築史の中で触れられることが少ないため、注意が必要である。

アマルナ型住宅は、大抵、塀をめぐらした広い敷地内にほぼ正方形平面の住宅が床面レベルを地面からやや立ち上げて建てられ、周囲に付属施設として穀物倉庫や調理場、家畜小屋、使用人の住まい、井戸、庭園、池、礼拝堂などが備えられる（図1・図2）。住宅内部の間取りについては、古代エジプト住宅研究の第一人者であるアーノルドの見解<sup>18</sup>を整理すると、以下のように玄関からの導入を成す前方部分(I)、ほぼ正方形の居間を中心置く中央部分(II)、寝室や浴室など私的性質の高い部屋を配置する後方部分(III)の3つに分類される。

### I. 前方部分

・住宅北側の前面隅部にはほぼ正方形の玄関ポーチが配置され、緩やかな勾配の階段または斜路によって導入される。

・住宅北側に大きな長方形平面の前室が配置される。通常この部屋では1列に2本あるいは4本の柱が立てられた。

### II. 中央部分

・住宅中央に居間に相当するほぼ正方形平面の広間が配置される。通常この部屋には1列2本または2列4本の柱が立てられ、主人とその妻のための台座、手洗いまたは室温調整のための水壺を置く石盤、冬または早朝に暖をとるための炉が備えられた。周りに配置された諸室への行き来は必ずこの部屋を介してなされ、各戸口は対称的に配置された。また戸口がない箇所においても、部屋のシンメトリーを崩さないように壁龕として偽の扉が設けられた。採光と通風のための窓は、周囲の部屋よりも天井高を上げて壁面の高い位置に設置された。

・中央広間の隣に屋上または2階へと通じる階段室が配置される。

・中央広間の隣に（大抵の場合は西側に）、柱を1列2本立てた長方形平面の部屋が配置される。

### III. 後方部分

・住宅南側の後方部の一角に、柱を1本立てた正方形平面の小広間が配置される。中央広間と同様に、台座や石製の水盤、炉などが備えられ、家族の一員のための私的な居間として利用された。

・住宅南側の後方部の一角に、主人のベッドが置かれる壇を備えた寝室が配置され、この部屋の隣には別個に石版で囲いを設けた浴室とトイレが付属する。

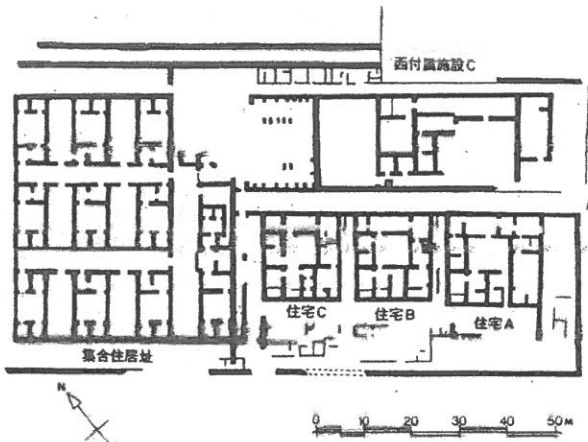


図3 マルカタ王宮西住居址 平面図  
(Lacovara 1997, Fig. 40より)

### 3. マルカタ王宮内の3軒の独立住宅

マルカタ王宮(古代名:ペル・ハイ)は、アマルナに都市を築いたアクエンアテン王の父であるアメンヘテプ3世王がルクソール西岸に造営した施設であり、その主要部分を成す東西500m、南北600mの敷地には「王の寝室」を備える主王宮や、アメン大神殿、プラットフォーム、北宮、西住居址などが存在する。このうち、西住居址には3軒の独立住宅が立ち並び、これより西に位置する集合住居址とをまとめて囲いこむように二重の壁がめぐらされている(図3)。これら3軒の独立住宅は20世紀初頭に大々的にマルカタ王宮全体の発掘をおこなったアメリカのメトロポリタン美術館調査隊によって東側から順番に住宅A、B、Cと記号が付されている。残存状況は住宅Aが最も良く、住宅Bおよび住宅Cではわずかに壁煉瓦が数段立ち残るだけであった。

残念ながら、メトロポリタン美術館調査隊によるマルカタ王宮に関する報告は一部の紀要を除き未刊行であるが、同美術館に収蔵された内部資料を用いて、ヘイズによって王宮内から出土した文字史料を基にした考察がおこなわれ、住宅A～Cの王宮内での役割についてもその中でわずかに触れられている。そこでは、王宮施設内で出土したパピルス文書に封をするための泥の印章の大半が住宅Bに集中していることが指摘されており、これを根拠としてヘイズは、住宅Bが王宮内における行政の中心的建物であり、王に仕える重要な役職である南の宰相のための公邸であったこと、住宅Aと住宅Cはそれぞれ宝物庫長と王の執事長のための公邸であったことを推測している<sup>19</sup>。ヘイズの論考を見るかぎりでは実際にこうした住居の所有者に関する文字史料が出土しているわけではないようであり、根拠が不明な点も少なくないが、これらの住宅を取り囲む二重の外壁や3軒が整然と並ぶ配置計画は、アマルナの都市域に築かれた住宅群には決して見ることができない特徴であり、王宮内の主要施設の一面を担う公的な建物として建造されたことは明らかだと思われる。

住宅A～Cの平面規模はどれもほぼ等しく、このうちわずかに大きき住宅Aは東西約18.5m、南北約19.4m(約360m<sup>2</sup>)を測るが、これはアマルナ遺跡に残存する多くの貴族住宅の中では大きき方である。それぞれの独立住宅において、中央広間に入る戸口の位置や特に東側に並ぶ部屋の間仕切り方に若干の相違がうかがわれるが、全体平面の形状が正方形に近いことや、平面を3分割して中央に住居内で

最も広い部屋を配置すること、入口が住宅の北東の隅に設けられていること、南西の一角に壇を備えた主人のための寝室が置かれていることは共通して認められ、いずれも前節で述べたアマルナに残存する典型的なアマルナ型住宅の基本構成と合致する点が注目される。平面規模についても何ら申し分はなく、すなわち、このマルカタ王宮内の3軒の独立住宅もアマルナ型住宅として計画されたと判断するべき十分な証拠を有していると考えられる。これらの住宅に用いられた煉瓦にはアメンヘテプ3世の王名スタンプが押印されており、アマルナ時代に建てられたことが明らかである。この点は、出土遺物の年代判定からも矛盾がなく、同住宅形式の起源を探る上で注意を留めておくべきであろう。

### 4. 考察:アマルナ以外の地域におけるアマルナ型住宅に類似した住宅について

新王国時代には、アマルナやマルカタだけでなく、アメン神信仰の総本山となるルクソール東岸のカルナック神殿近辺や、政治的拠点として機能したメンフィス地域、ラメセス時代の新首都として開発されたカンティール地域に大規模な都市が存在したことが文字史料などから広く知られているが、これらの遺構の大部分は現在の住宅または農耕地の下に埋もれたままであり、事実上全般的な発掘調査は困難な状態にある。また、広大な都市遺跡の部分的な発掘だけでは成果が非常に限られるという点もあるため自ずと長期的な調査が要請されるにもかかわらず、逆にこのことが理由となって発掘調査の経済的な支援を受けることが難しいという現実的な問題も同時に存在している。古代エジプトの都市の有り様や住宅形式の変遷についての見解が、唯一まとまった資料を提供するアマルナ遺跡の遺構例を中心に置いて凝滞しているのは、このような状況に大きく起因していると言えよう。

こうした中、マルカタ王宮内の住宅A～C以外にもわずかではあるが、アマルナ以外の地域においてアマルナ型住宅が存在したのではないかと指摘を発掘調査報告や既往研究に見ることができる。これには実遺構だけでなく絵画資料からの指摘も含まれるが、現在のところ個々の研究者がアマルナ型住宅の定義を曖昧にしたまま独自の視点で論じているという問題を孕んでいる。以下では、それぞれの見解を再検証していくことで、マルカタ王宮内の住宅A～Cの歴史的な位置づけを浮き彫りにすることとした。

#### コーム・アル＝アブドゥーにあるアメンヘテプ3世時代の基壇状建物址

コーム・アル＝アブドゥーは、ルクソール西岸にあるアメンヘテプ3世のマルカタ王宮址から南西約3.5kmに位置する遺跡であり、南北約44m、東西約39m、高さ約4mの規模を有する基壇状の建物と、その東側に設けられた複数の比較的小規模な住宅址で構成されている(図4)。遺構の建造年代は、日乾煉瓦に押されたスタンプによりアメンヘテプ3世の時代であることが明らかとなっているが、基壇状建物の機能については判然としていない<sup>20</sup>。注目すべき点は、この遺構は基壇として建造される前にいくつかの部屋を内部に造ろうとしていたことであり、すでにケンプも指摘するように平面図からは正方形に近い全体平面を3分割するような構成や、南東隅にある寝室、側面にあるスロープ状の導入路など、典型的なアマルナ型住宅と類似する特徴が認められる。もし、これが本当に当初アマルナ型住宅を計画したと

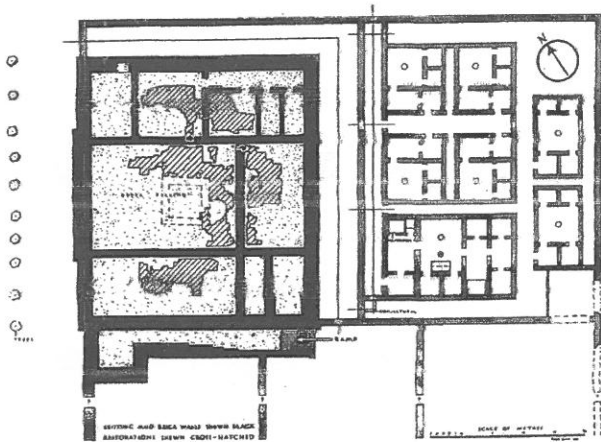


図4 コーム・アル=アブドの墓壇状建物 平面図  
(Kemp 1977, Fig. 2より)

見做されるのであれば、この建物もまたマルカタ王宮内の独立住宅A～Cと同様にアマルナ時代以前に造られた例として重要である。しかしながら、より慎重に眺めると、南側隅に見られる寝室の大きさは約9.4x4.8mもあり、アマルナ遺跡における高官のための住宅址にはこのような大きさの寝室は決して見ることができず、むしろマルカタ主王宮内にある「王の寝室」の大きさ（約10.6x4.6m）に匹敵するという問題も存在する<sup>21</sup>。また、建物全体の平面規模は1,700m<sup>2</sup>以上もあり、アマルナ遺跡の貴族住宅の規模が最大でも500m<sup>2</sup>前後に過ぎないという点も考えるならば、このコーム・アル=アブドの遺構をアマルナ型住宅の類例として見ることは困難であるように思われ、王のための居住施設としてふさわしい規模の建物が最初に計画された可能性が指摘される。

#### ギザにある18王朝時代の住居址

古王国時代の3大ピラミッドで有名なギザの砂漠台地は、1,000年以上後の新王国時代の人々にとって、古代の偉大な王たちを祀る神聖

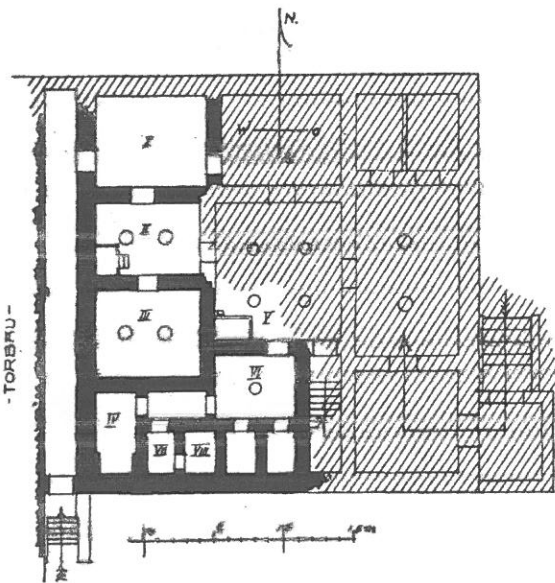


図5 ギザにある18王朝時代の住居址 推定復原図  
(Hölscher 1912, Abb. 75より)

な場所であり、特にカフラー王のスフィンクス像は太陽神ホルエムアケトと同一視されて信仰を集めた。王や高官たちはこの地を度々巡礼に訪れたが、同時に当時のギザ台地はチャリオットや狩りの練習場としても好まれて利用された場所であった。18王朝時代の住居址は、スフィンクス像のすぐ隣にあるカフラー王の河岸神殿の東側で発見された<sup>22</sup>。近隣からはアマルナ時代前後の遺物が見つかっており、詳しい建造年代については明らかではない。住居址全体の平面構成について、発掘をおこなったヘルシャーは同じ新王国時代の住宅形式として有名なアマルナ型住宅にならって仮の復原を試みたが（図5）、この復原図だけがよく引用されるために、ギザの住居址はアマルナ以外の地域のアマルナ型住宅の類例として紹介されることが少なくない。しかしながら、実際のところ発掘されたのは図5で黒く塗りつぶされた壁体の部分だけであり、住居の大半がすでに失われていた。従って、復原には疑問の余地が大きく残されており、この遺構をアマルナ型住宅の類例として考えることは慎重になるべきであろう。ケンプは、王がギザ台地に訪れた際に利用する「休息所」または「小宮殿」であると指摘しているが<sup>23</sup>、仮にヘルシャーの復原がおおよそ妥当だとしても、住宅の平面規模が約850m<sup>2</sup>にもなるため、アマルナ型住宅としては例のない大きさとなり、やはりケンプが考えるように王のための施設と見做して全体平面を再考する必要があるように思われる。

#### ルクソール東岸にある18-19王朝時代の住居址

ルクソール東岸におけるエジプト考古最高会議(Supreme Council of Antiquities)の指揮による近年の発掘の結果、ルクソール空港に向かう舗装道路の脇で第18王朝から19王朝時代に年代付けられるいくつかの住居址が新たに発見された。この遺構については、発掘者と個人的に情報交換をおこなったラコパーラーが自らの著作の中で簡単に記述しており、典型的なアマルナ型住宅の平面構成を簡略化したようなものであると指摘している点が注目される<sup>24</sup>。しかしながら、発掘者自身による正式な報告はいまだなされておらず、平面図や写真さえも全く公表されていないために、ラコパーラーの解釈が正当であるのかどうか客観的に判断することができない。アマルナ型住宅の成立と普及を考える上で重要な遺構の一つと成りうる可能性があるが、今後の調査の進展によって建造年代が明らかにされ、詳しい報告がなされることを期待したい。

#### ルクソール西岸の第104号岩窟墓の壁画に見られる住宅

ルクソール西岸における新王国時代の高官たちの岩窟墓内にしばしば描かれた住宅の図像は、実遺構の発掘が困難であるテーベ（現在のルクソール市）の住宅形式を伝える貴重な資料である。第104号墓として登録されたアメンヘテプ2世時代のジェフティネフェルという人物の岩窟墓では、個々の室内の様子を詳細に表した図像が見ついている（図6）。一見この絵画は現代の建築図面と言うところの断面図のようであり、こうした絵画資料などを基に従来デビスやバダウィらは、多層階の住居が並んでいる様子をテーベの都市の姿として考えていたが<sup>25</sup>、1983年にアサドは、ジェフティネフェルの住宅の図像は断面図ではなく、奥に配置される部屋が上に描かれるという独特の表現方法が採用されていると解釈し、これに従うならばアマルナ型住宅に類似した平面構成を有する平屋建ての住宅として復原されることを論じた<sup>26</sup>。これはアマルナ時代からおおよそ50年も遡る時代に、テー

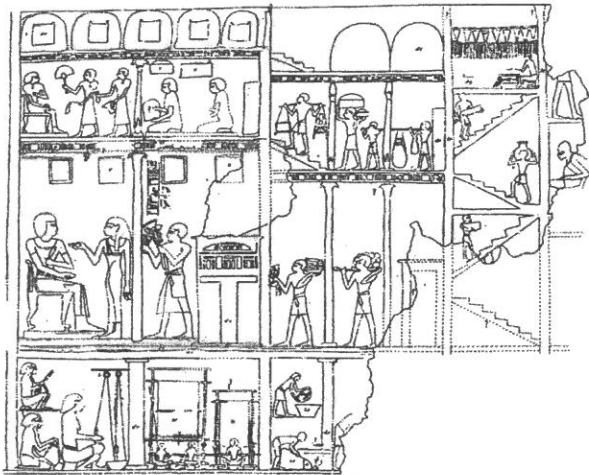


図6 テーベ第104号墓ジェフティネフェルの墓室内に描かれた住宅の図像

(Assaad 1983, Fig. 1より)

べにおいてすでにアマルナ型住宅が存在したという主張になるという点で重要である。しかし、1995年9月にイギリスのケンブリッジで開催された第7回エジプト学国際会議において、ドワヤはアサードの解釈を否定し、墳墓の壁画として住宅の外観が描かれる場合、大抵は二階建てであるという理由からジェフティネフェルの住宅の図像は、断面図と平面図を混合させた絵画表現であると考え、アマルナ型住宅とは全く異なるかたちの二階建ての住宅として2つの復原案を提示した<sup>27</sup>。互いの見解は、絵画表現の解釈の仕方に大きく委ねられており、テーベにおける実遺構の発掘を待たない限り、現時点ではどちらの説が正当であるか判断するのは難しい状況にあると言ってよい。従って、アサードの指摘は参考程度にとどめておくのが無難であろう。

#### カルナックのアテン大神殿の壁面に描かれた住宅

アメンヘテプ4世がアマルナに遷都する前に、カルナックのアメ

ン大神殿の東に建造したアテン大神殿の石材にも隣り合う3軒の住宅が描かれている(図7)。これらの石材は、アテン信仰の廃絶のためにアテン大神殿を徹底的に破壊したホルエムヘブ王によって、第9塔門内の詰め石として再利用されたものであるが、フランス調査隊により復原が進められ、現在はルクソール博物館の2階に展示されている。描かれた3軒の住宅については、トラウネッカーの考察によって、アサードと同様に奥に配置される部屋が上に描かれると見做すことでアマルナ型住宅として復原されることが指摘され、個々の室内における生活の様子や家具が異例なほどに事細かく描き込まれている理由は、アメンヘテプ4世によって創造された新都市アマルナにおける高官たちの邸宅の見本として示されたためではないかと推測されている<sup>28</sup>。アマルナ型住宅がまず最初はテーベでモデルハウスのように導入されて新都で普及したという興味深い指摘ではあるが、これもまた絵画表現の解釈の仕方によっては完全にアマルナ型住宅として復原することが正しいかどうか異論があるように思われ、結論も飛躍し過ぎである感が否めない。住宅図像の左隣にはアテン神殿に奉納される供物のための倉庫が描かれており、この管理に従事していた高官たちが仕事場を兼ねて居住していたのではないかというトラウネッカーの見解は妥当であると思われるが、これら3軒の住宅が実際にどこに存在したかは不明なままである。第104号墓に描かれたジェフティネフェルの住宅と比べれば、こちらの方が中央の広間の他、寢室や浴室と思われる部屋が認められるなどの点でアマルナ型住宅により近い印象があり、トラウネッカーの指摘は黙殺してはならないであろうが、絵画資料であるが故の不確定要素を持ち合わせていることを注意に留めて置かなければならない。

以上、アマルナ地域以外におけるアマルナ型住宅の類例として指摘されている遺構や絵画資料を個別に取り上げ、それぞれにおける既往解釈の妥当性について検証してきた。いずれの場合にも共通して言える問題は、エジプト各地における都市遺跡の全般的な発掘がまだ困難である中で、最もよく知られているアマルナ型住宅という形式にとられすぎず、個々の判断基準について厳密な説明や検討もなしにア

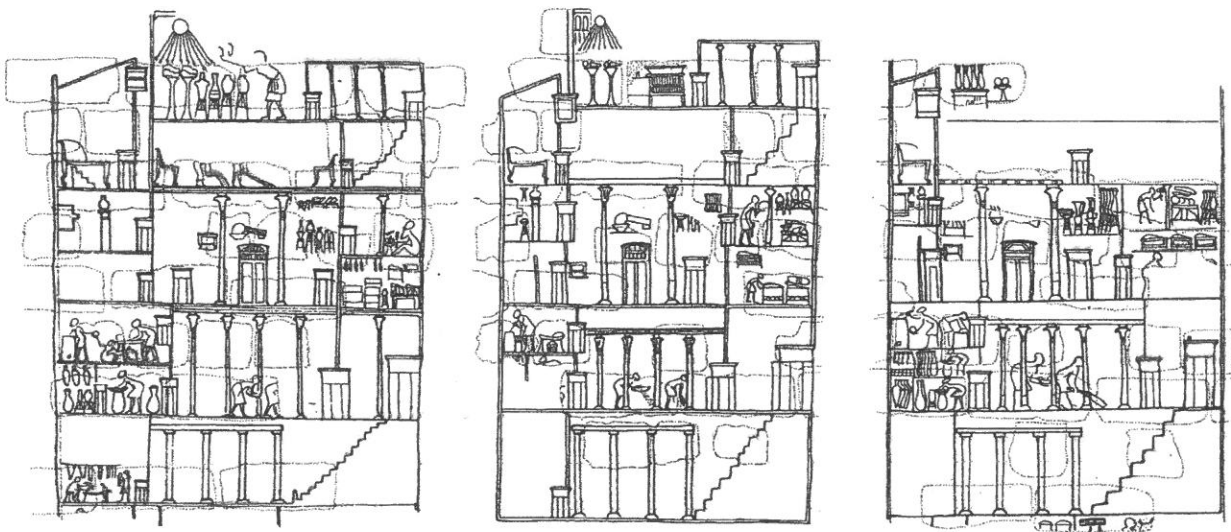


図7 カルナックに存在したアテン大神殿の石材に描かれた3軒の住宅

(Traunecker 1988, Fig. 1, 2, 3より)

マルナ型住宅と似ていると語られている点である。ギザの住居址に関するヘルシャーの考察や、アサードやトラウネッカーによる絵画資料の解釈の場合は、はじめからアマルナ型住宅のように復原することを前提にしているものであり、この前提条件がいつのまにか裏返しに結論となって、アマルナ地域以外にもアマルナ型住宅が存在したという主張は受け入れがたいであろう。これらの見解は参考資料として保留しておく必要は十分にあるが、こうした一方で前節で述べたマルカタ王宮内の住宅A～Cの場合、建造年代がアマルナ時代直前のアメンヘテプ3世時代に当たることが明らかであり、3分割される平面構成や規模などの面において、アマルナ遺跡に建造された高官たちの住宅形式にこれ以上類似するものが他に見当たらないという点は強調されて良いと思われる。住宅遺構の資料は限定的ではあるものの、言うなれば、マルカタ王宮内の3軒の独立住宅A～Cは、アマルナ型住宅の初例として現在知られる唯一確かなものと結論することができ、建築史的観点において、いまだ不明なところが多い同住宅形式の成立過程に関して、新たな光を投じる重要な遺構であると評価される。

## 5. 結語

ピラミッドや神殿建築などの影に潜み、これまであまり注目されることがなかった古代エジプトにおける住宅建築に関し、本稿では新王国時代の高官のための住宅形式として最も良く知られるアマルナ型住宅を主題とした考察を試み、アマルナ時代以前に建造されたことが明らかなルクソール西岸のマルカタ王宮内に残存する3軒の独立住宅A～Cが、ほぼ正方形の全体平面を3分割して、北側に玄関、中央に広間、後方に寝室を配するというアマルナ型住宅の基本構成と合致することを改めて検証した。一方、他にもアマルナ以外の地域にアマルナ型住宅が存在したのではないかという主張が、残存遺構や絵画資料の解釈からこれまでにもいくらかなされていたが、これらの見解について問題点を整理した結果、いずれも不確定な要素を持ち合わせているため現段階では慎重な立場をとるべきことがうかがわれ、マルカタ王宮の3軒の独立住宅が、アマルナ型住宅の初例として現在知られる唯一確かなものであると結論された。これらの住宅遺構については、同住宅形式の成立過程を探るためにも、アマルナに残存する住宅遺構との比較考察を通じてより詳しく建築的特徴を明らかにすることが望まれ、この問題に関しては稿を改めて論じることとした。

## 註・参考文献

1. 本稿は、西本真一先生（早稲田大学理工学部助教授）の指導の下で執筆した筆者の卒業論文「アマルナ型住居の成立に関する一考察」、早稲田大学理工学部建築史研究室（1995年11月）を基礎とし、その後発表をおこなった「マルカタ王宮内アマルナ型住居について - マルカタ王宮に関する研究42 -」、日本建築学会大会学術講演梗概集（1996年9月）、393-394頁、「Amarna-type Houses at the Malqata Palace-city」, *The Journal of the Society for the Study of Egyptian Antiquities* 25 (1998) 23-37の前半部分に大幅な加筆修正をおこなったものである。本研究に当たり、早稲田大学エジプト学研究所所長・吉村作治教授より、マルカタ王宮調査に関する資料を利用する御許可を賜った。記して感謝申し上げる。
2. J. Wilson: "Egypt through the New Kingdom: Civilization without Cities", in C. H. Kraeling and R. M. Adams eds.: *City Invincible* (Chicago 1960), 124-136.
3. M. Bietak: "Urban Archaeology and the Town Problem in Ancient Egypt", in K. Weeks ed.: *Egyptology and the Social Sciences* (Cairo 1979), 95-144.
4. B. J. Kemp: "The Early Development of Towns in Egypt", *Antiquity* 51 (1977), 185-200; *idem*: "The City of El-Amarna as a Source for the Study of Urban Society in

Ancient Egypt", *World Archaeology* 9-2 (1977), 123-139.

5. W. M. F. Petrie: *Tell el-Amarna* (London 1984), 20-25.
6. T. E. Peet and C. L. Woolley: *The City of Akhenaten I* (London 1923), 37-50.
7. H. Ricke: *Der Grundriss des Amarna-Wohnhauses* (Leipzig 1932).
8. L. Borchardt and H. Ricke: *Die Wohnhäuser in Tell el-Amarna* (Berlin 1980).
9. B. J. Kemp and S. Garfi: *A Survey of the Ancient City of el-Amarna* (London 1993).
10. 例えばティーツェは、家屋を壁厚や部屋数などによって8つのタイプに分類し、ここからアマルナの住人が3つの層に大別されるという結論を導き(C. Tietze: "Amarna: Analyse der Wohnhäuser und soziale Struktur der Stadtbewohner", *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 112 (1985), 48-84; *idem*: "Amarna (Teil II): Analyse der ökonomischen Beziehungen der Stadtbewohner", *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 113 (1986), 55-78; *idem*: "Amarna, Wohn- und Lebensverhältnisse in einer ägyptischen Stadt", in M. Bietak: *Haus und Palast im Alten Ägypten* (Wien 1996), 231-237.)、クロッカーは全782戸の住宅をデータベース化し、住宅の規模に応じて備えられる諸室や付属施設の数が異なることを統計的に示し(P. T. Crocker: "Status Symbols in the Architecture of el-Amarna", *The Journal of Egyptian Archaeology* 71 (1985), 52-65.)、またエンドルヴァイトは、住居内における空気の対流などを考慮して、環境に適応する都市型住宅の性格を明らかにしている(A. Endruweit: *Städtischer Wohnbau in Ägypten: Klimagerechte Lehmarchitektur in Amarna* (Berlin 1994).).
11. H. Ricke: *op. cit.*, 13-15.
12. H. W. Fairman: "Town Planning in Pharaonic Egypt", *The Town Planning Review* 20 (1949), 42.
13. F. Arnold: "A Study of Egyptian Domestic Buildings", *Varia Aegyptiaca* 5 (1989), 78-81.
14. C. von Pilgrim: *Untersuchungen in der Stadt des Mittleren Reiches und der Zweiten Zwischenzeit. Elephantine 18*. Archäologische Veröffentlichungen, Deutsches Archäologisches Institut, Abteilung Kairo 91 (Mainz 1996).
15. P. Lacovara: *The New Kingdom Royal City*, (London and New York 1997), 60.
16. 後藤久: 「西住居址」、中川武・西本真一編: 『マルカタ王宮の研究: マルカタ王宮址発掘調査1985-1988』中央公論美術出版、1993年、207-209頁。
17. C. Tietze: "Amarna: Analyse...", *op. cit.*, 56-58, abb.1.
18. Cf. F. Arnold: "Houses", in D. B. Redford ed.: *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt* 2 (Oxford 2001), 122-127.
19. W. C. Hayes: "Inscriptions from the palace of Amenhotep III", *Journal of Near Eastern Studies* 10 (1951), 177.
20. 「王の休息所」だとするケンプの見解(B. J. Kemp: "A Building of Amenophis III at Kôm el-'Abd", *Journal of Egyptian Archaeology* 63 (1977), 71-81.)の他、都市の最南端に位置する「監視所」だとするラコバーラーの見解(P. Lacovara: *op. cit.*, 14.)がある。その他、吉村作治: 「マルカタ南 - 魚の丘遺跡に於ける諸問題 コム・アル・アブド遺跡との比較研究」、『史観』第104冊、早稲田大学史学会、1980年、32-40頁の中でも触れられている。
21. 古代エジプトの住宅建築における寝室の大きさ比較については、D. Eigner: "A Palace of the Early 13th Dynasty at Tell el-Dab'a", in M. Bietak: *Haus und Palast im Alten Ägypten* (Wien 1996), 78-79, Fig. 3を参照。
22. U. Hölscher: *Das Grabdenkmal des Königs Chephren* (Leipzig 1912), 80-88.
23. B. J. Kemp: *Ancient Egypt, Anatomy of a Civilization* (London 1989), 218-222.
24. P. Lacovara: *op. cit.*, 61.
25. N. de G. Davies: "The Town House in Ancient Egypt", *Metropolitan Museum Studies* 1 (1929), 254; A. Badawy: *A History of Egyptian Architecture III* (Berkeley 1968), 15-21.
26. H. A. Assaad: "The House of Thutnefer and Egyptian Architectural Drawings", *The Ancient World* VI, nos. 1-4 (1983), 3-20.
27. F. Doyen: "La figuration des maisons dans les tombes thébaines: une relecture de la maison de Djehutynefer (TT104)", in C. J. Eyre ed.: *Proceedings of the Seventh International Congress of Egyptologists* (Leuven 1998), 345-355.
28. C. Traunecker: "Les maisons du domaine d'Aton à Karnak", *Cahier de Recherches de l'Institut de Papyrologie et d'Égyptologie de Lille* 10 (1988), 73-93.

(2002年4月10日原稿受理、2002年7月19日採用決定)